

伊藤道治先生をしのぶ

松 井 嘉 徳

伊藤道治先生が二〇一六年四月三日にご逝去された。先生の学恩に對して心からの感謝を捧げるとともに、先生のご冥福をお祈りしたい。

私が初めて先生にお会いしたのは一九八一年の春であった。大学院の入試に失敗して途方にくれ、島田虔次先生にお願いして紹介状を書いていただき、滋賀県石山寺のご自宅に伺った。先生と奥様は、この見知らぬ若造を暖かく迎えてくださったが、なにせ先生は寡黙な方だったので会話がはずむはずもなく、緊張した時間を過ごしたことが思い出される。それでもなんとか金文を用いた卒論を提出したことが、これからも金文や甲骨文に関わる研究を続けたいことをお伝えしたが、先生は『春秋左氏伝』や『史記』『漢書』といった古典籍をしっかり勉強することが第一であり、最初から金文や甲骨文を研究対象とするのはダメだと強く諭された。

しかしながら、当時の私はそれでも金文の研究を志したいとお願ひしたのである。結局、先生は次年度からの講義の聴講をお許しく下さり、私は聴講生の末席に連なることができるようになった。

講義は水曜日の一限で、先生は前日から研究室に泊まっておられ、

教室にはジーンズなど比較的ラフな格好で登場されていた。教室の最前列に陣取っていたのは、すでに何年か前から聴講を許されていた関西学院大学の故・木村秀海さんと、もう一人は確か佐藤さんとお呼びしていたお二人で、そこに私が加わって三人組となり、その後ろに神戸大学の学生さんたちが座るといふ何やら不思議な光景ではあった。手許に一九八一年度の講義ノートが残っている。まだ金文をほとんど知らなかった頃のもので、先生の講義内容を本当に理解していたのか甚だ心許ないけれども、その五月六日のノートには、

⇒ 金文は戦功、任命を祖先に告げるために作器者によって作文され、祖先に対する祭祀の際に読み上げられたと考えられてきた。

松丸道雄氏は、作文したのは作器者ではなく、作器者に命じた王である。王が作器者に対して文章を作り与え、王が与えた恩寵を明記させて、王の権威を確認させる。器は王直属の工房で作られたのであろう、と主張する。

と書き記されている。松丸氏が「西周青銅器製作の背景―周金文研究・序章―」（一九七七年、のち『西周青銅器とその国家』一九八〇年に再録）や「西周青銅器中の諸侯製作器について―周金文研究・序章その二―」（一九七九年、のち『西周青銅器とその国家』）で主張されていた金文の作文主体に関わる議論への反論が始まろうとしていた。続く五月一三日の講義では、作冊鬲由「佳十又九年、王在斥、王姜命作冊鬲、安夷伯、夷伯賓鬲貝・布、揚王姜休、用作文考癸宝罍器」、作冊鬲尊「在斥、君命余作冊鬲、安夷伯、夷伯賓用貝・布、用作朕文考日癸旅宝」両器の器影・拓本のコピーなどが配布され、それらを根拠とした松丸氏の主張が丁寧で紹介されている。

その後、西周中期以後の金文に常見するものの、慣用句とみなされ、さほど考察の対象とならなかった「対揚王休」の議論へと移り、沈文倬「対揚補釈」（一九六三年）や林澧・張亜初『『対揚補釈』質疑』（一九六四年）の内容などが紹介され、「対揚王休」とは王の恩寵に対する被冊命者の感謝及び記録であり、作器者自身によって書かれなければならない、という結論が導き出されている。議論はさらに冊命金文全般に及び、善夫山鼎銘や頌簋銘などが参照され、冊命金文は被冊命者が自発的に再録したと思われると思われると述べておられる。冊命金文が周王側で作られたということを積極的に肯定する根拠はみいだせない、という武者章「西周冊命金文分類の試み」（一九七九年、のち『西周青銅器とその国家』）の結論が紹介されたのち、

松丸氏が鬲尊が鬲側で作られたとする際、鬲由が王室側で作られ

たということが前提となっている。

↑↓鬲由が王室で作られたことは証明されていない。

←

武者論文の如き結論が出ざるをえない。

と述べられ、『礼記』祭統「夫鼎有銘、銘者自名也」の一文が参照されたうえで、銘文の大半は王室によって作られた冊命文によるが、銘自体は作器者によって用意されたと考えてよい、という結論が導きだされている。

言うまでもなく、ここで紹介した講義内容は、のちに一九八七年の「西周金文とは何か―恩寵と忠誠―」（『中国古代国家の支配構造』）へと結実する議論であるが、私のノートによるならば、最終的な結論が講義されたのは六月二四日であった。ほぼ二ヶ月にわたった講義をここで紹介したのは、先生の議論がいかに慎重で堅実なものであったかを偲びたいためであるが、それと同時に、松丸氏の主張に対して非常に早い時点で金文の本質に関わる論争を挑まれていたことにも思いをはせたい。金文の作文主体が誰であるかという問題は、現在も未だ結論を得ていない難問であり、先生が我々に託された課題ともいえる。

先生は一九二五年六月七日にお生まれになり、京都帝国大学文学部に入学したのち、一九四八年には貝塚茂樹先生のもと、「旧東方文化研究所歴史研究室に机を与えられ」（『中国古代国家の支配構造』あとがき「追い書き」）、中国古代史の研究を始められた。『東方学』第

九九輯（二〇〇〇年）の「座談会 学問の思い出—白川静博士を囲んで—」に出席された先生は、「私にとっては一番最初の駆け出しのときの仕事だった」（一七五頁）『書道全集』（一九五四年）の編纂について、

人文科学研究所の方で貝塚先生を中心にして金文だとか甲骨を讀んで、それで『書道全集』に仕上げようという計画になりました。（一七五頁）

と回顧され、その編纂にかかわった先学として、

編集責任は貝塚茂樹先生、内藤戊申先生、赤塚忠先生、大島利一先生、それから『書道全集』には直接には書いておられなかったと思いますが、ときどき樋口隆康さん。それからもちろん白川先生でした。（一七五頁）

といった研究者の名を挙げておられる。さらに、

ある意味で、甲骨文の解説方法は私の師匠よりも白川先生の著作から教えられた面が非常に多いと思います。（一七六頁）

と述べておられるように、先生は貝塚茂樹や白川静といった戦後第一世代の研究者の許で研鑽をつまれました。その後、先生は人文科学研究所

助手を経て、一九五九年に神戸大学に赴任され、一九八九年の退官後は関西外国語大学教授・国際文化研究所所長を歴任された。神戸大学ご退官にあたって、江村治樹氏に「伊藤道治先生の業績紹介」（『神戸大学史学年報』第三号、一九八八年）の一文があり、先生の主要な研究の紹介はそれに譲りたいと思うが、先生のご研究の特徴は、先生も述べておられるように、どちらかというと白川先生に近い、甲骨文や金文あるいは文献史料に寄り添い、それらを慎重かつ堅実に読み解いていく点にあったように思う。『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』図版冊（一九五九年）・本文篇（一九六〇年）・索引（一九六八年）は言うに及ばず、藤井有鄰館・黒川古文化研究所・天理大学付属天理参考館などの甲骨文コレクションの整理・釈読、あるいは「永孟銘考」（一九七三年）・「盞彝銘考」（一九七七年）・「裘衛諸器考—西周期土地所有形態に関する私見—」（一九七八年）といった金文の考証、あるいは「左伝に見える西周封建制度について」（一九六七年、のち『中国古代王朝の形成』『西周『封建制度』考』一九七五年）や「两周地理考」（一九六九年、のち『中国古代王朝の形成』『姫姓諸侯封建の歴史地理的意義』）などといった論文は先生のご研究の特徴をよく示しているように思われる。

いつのことだったかは覚えていないが、中国古代史の研究は野球選手の打率のようなものだとおっしゃったことがある。生涯打率が三割を越える選手はほとんどいない、名選手だ。中国古代史研究もそれと同じで、議論の三割が正鵠を得ていれば、それで充分に研究者としては評価できる、といった趣旨であったように思う。先生が野球をお好

きであったのか、お好きならば、どの球団がご鼻屑であったのか、というのを伺ったことはなかったのだが（先生は名古屋生まれだから、中日？）、このお話は駆け出しの私には随分とありがたかった。「七割間違ってもいいんだ」という能天気な安堵感を感じたのを覚えているが、先生のおっしゃりたかったことはそうではなかっただろう。我々は中国古代史の三割どころか、ほとんど何も理解していないのではないか。せめて三割でも事実に近いければ。そのような思いが先生の慎重かつ堅実な研究を支えていたのではなかったのだろうか。

先生とご一緒に海外の学会に参加したのは、一九九二年一〇月に西安市で開催された「第二次西周史学術討論会」であった。先生のほか、日本から参加したのは私と木村秀海さん、そして成家徹郎さんであったが、先生とは別便で西安市に到着した私と木村さんに対して先生は不思議と饒舌であった。先生によると、咸陽の飛行場から西安市に至るタクシーが「高速道路」でエンストして止まってしまった。車の修理をする運転手にかわって、先生はタクシーが追突されないようにと旗のようなものを振り続けていたとのことであった。何やら妙に嬉しそうだったお顔を思い出す。先生にはよほど愉快的経験だったのでだろうか。

学会において、先生はいつも中国の研究者と共にいることを心がけておられた。日本人だけかたまってはいけけないとおっしゃり、ホテルの朝食などでは常に中国の研究者のテーブルで食事をとられていたし、学会後のエクスカージョンでも同じように振る舞っておられ

た。先生はごく普通に中国の人々と交わり、何の違和感もなくそこに溶けこんでおられた。今でも先生は、中国のどこか、それは安陽か西安かもしれないが、先生が研究してこられた史料の近くのどこかで、ここにこと微笑みながら佇んでおられる気がする。

また中国のどこかで先生にお会いできればと思います。先生、ありがとうございました。

（京都女子大学文学部教授・
立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員）